

『日本帝皇年代記』について——入来院家所蔵未刊年代記の紹介——(下)

山口隼正

On the *Nihon Teiō Nendaiji*—An Introduction to an Unpublished Chronicle Owned by the Irikin Family—(Part 3)

Takamasa YAMAGUCHI

前回(中)は、「九十五 花園院」までの分について翻刻、紹介したが、『長崎大学教育学部 社会科学論叢』六五号、二〇〇四年六月、今回(下)は、続いて「九十六 後醍醐天皇(在位 文保二〇曆応二・延元四、一三一八〜一三三九)以降、最後の正保三年(一六四六)までを扱う。この時期は、先ず後醍醐天皇による建武政権、続く南北朝時代があり、やがて江戸時代前期に及んでいる。以下、今回(下)収録分について、注目を挙げつつ、若干コメントしておこう。

〔中央系記事の簡略化〕

本書『日本帝皇年代記』は、特に今回(下)収録分において、しだいに中央系記事が減少し簡略化し、代わって地域性が濃厚化する傾向にある(補注1)

① 天皇記事の簡略化

これまで天皇(院)各代ごとに、はじめに見出し(代順十天皇

名)があり、その下に割書き(注記)が付いていたが、概ね今回(下)の「九十七 光厳院」以降、割書きにおいて崩御年(月日)の記事が見えなくなる(注1)。

また「百七 後奈良院」(大永六年〓一五二六即位)以降は、見出しに割書き部分が備わっていない。

やがて見出しとしての天皇(院)名の表記も見えなくなる。「百七 後奈良院」の次には、見出しとして「今上皇帝」(永祿三年〓一五六〇即位)があるが、これは正親町天皇(一〇八。在位弘治三—天正一四年、一五五七—一五八六)に当たる。本書『日本帝皇年代記』は、一往、この「今上皇帝」(一〇八)の時期に先ず成立したといえよう。ただ本書の記事はご覧のように、その後、特に「甲子寛永元年」(一六二四)からは後筆(異筆)となり(後掲[図1])、書き継がれて「壬午十九」(寛永一九年、一六四二)まで見え、さらに年次のみを表記だが、「丙戌三」(正保三年、一六

四六)にまで及んでゐる。なお「今上皇帝(正親町)のあと本書の末尾(正保三年)までは、後陽成(一〇九、天正一四年―一五八六即位)、後水尾(一一〇、慶長一六年―一六一一即位)、明正(一一一、寛永七年―一六三〇即位)、後光明(一二二、寛永二〇年―一六四三即位)というように、四代の天皇が即位しているが、かれらについては表記されていない(見出しなどない)。

② 改元記事(月日)の省略化

改元に際して、従来は該当年に月日まで記載されていたが(「戊申正長、四月廿七日改元」、一四二八年)、「永享」からは月日の記載がない場合が見え始め(「己酉永享」、一四二九年)、ついに「文龜」(「辛酉文龜」、一五〇一年)以降の年号(改元)については月日の記載が全くないと気付く。

③ 全国く中央関係記事の減少と南九州関係記事の増加

時代が下るにつれ、しだいに全国く中央関係記事が簡略化、減少し、頭書(欄外記事)も激減し、かわつて地域性が強まり、南九州関係記事が増加する。この点、具体的には後述する。

④ 中国関係記事の消滅

今回(下)において中国関係記事は、これまで(上、中)とは違つて一般記事(生没、仏僧、文学関係など)は全く見えず(補注2)、年号関係の記事(皇帝即位年や改元)のみ見えるが、これも次第に簡略となり、最後は「大明正徳元年」(丙寅、永正三年、一五〇六)とか、「嘉靖元年」(壬午、大永二年、一五二二)と記す程度である。この「嘉靖」以降、中国年号は表記されていない(実は長野県・光前寺所蔵『和漢年代記』も同様)。

「南北朝期、北朝採用く年号表記」

本書『日本帝皇年代記』において、「九十六 後醍醐天皇」のあとだが、「九十七 光厳院」く「百一 後円融院」と北朝方のみを代数に入れ(見出し)、北朝年号を表記(見出し)している。この点、前近代に成立した年代記類や『本朝皇胤紹運録』は、同様(北朝く北朝年号採用)だといえる。しかし明治以降、現在の辞典などに収録される天皇系譜(注2)では、一般に『皇統譜』(注3)によつて、南朝を代数とし(97後村上、98長慶、99後龜山)、北朝を正統な代数に勘定していない(北朝1光厳く北朝5後円融とある)。

なお本書『日本帝皇年代記』では、南朝―天皇名は見えないが、「官方」年号について記載がある。即ち元弘二年(一三三二)に「三月廿三日官方年号始之」とあり、下つて明徳三年(一三九二)に「自此官方年号被止之」とあり、その間、建武三年(一三三六)に「官方延元元年也」(頭書)、至徳元年(一三八四)に「官方元中元年也」などと、その都度、官方年号の改元記事が見える。

「生没記事、特に新義真言僧の記事多し」

本書は、多くの人物について生没日(年月日)、とりわけ生日(誕生日)までも記載している例が極めて多い。その記載内容も概ね妥当である。この点、これまで(上、中)でも述べて来たが、他の年代記とは異なる、本書の大きな特徴だといえる。

前回(中)において、覚鑿、ついで頼瑜が出てからは新義真言系僧侶の生没記事が多くなることを指摘したが、今回(下)は、その傾向が一段と顕著になる。高野山と根来寺の僧侶の生没記事が多いが、とりわけ頼瑜(高野山中性院始祖、根来寺初代学頭)に因んで、中性院流と根来寺学頭関係が多い。このうち中性院流の頼瑜・頼淳・増喜・聖憲・良審・聖増・聖融(頼瑜・聖憲・聖融は根来寺学頭に

もなる)、根来寺学頭の良殿・長盛・頼誉については、生・没双方の記事が備わり(兼備)貴重だといえる。(注4)

そして今回(下)において、特に頼瑜(嘉元元年||一三〇四没)について「頼瑜法印百年忌」(応永一〇年||一四〇三)とか「根来中性院元祖頼瑜法印二百年忌」(文龜三年||一五〇三)とあり、寛鑿(康治二年||一一四三没)について「寛鑿上人入滅已後三百七十年也」(永正一〇年||一五二三)と見える。

「南九州関係記事の激増」

本書は、入来院家―南九州に伝来した史料にかかわらず、当地域関係の記事は一向に見えず、それが初めて見えるのは、前回(中)の、鎌倉初期、建久六年(一一九五)「嶋津判官忠久薩摩下向」なる記事だった。南九州関係の記事は、その後も一向に見えず、今回(下)で、やっと南北朝中期、貞和元年(一三四五)「七月十七日石屋(真梁)和尚誕生、薩州嶋津忠久裔也」とか、延文二年(一三五七)「薩州泊津始建立海印寺」などと見える程度で、それが増加するのは、南北朝合一以後、十五世紀からだといえる。

① 坊津―仏寺関係、対外関係記事

坊津は、薩摩半島の西南端に位置、東シナ海に面し、古来、海上交通の要衝と見られている。地名は、当地に所在の一乗院の僧坊に由来し、近接する泊津とあわせて、坊泊(薩摩国河辺郡)と呼ばれている。

当地の仏寺関係としては、坊津の一乗院・広大寺と泊津の海印寺・実相院の記事、特にその僧侶の生没記事が見える。このうち泊津の実相院は、本書で見えるが(嘉吉二年、一四四二)、他に一向に見かけない寺院である(『三国名勝図会』や地名辞典類に

見えない)。それはともかく一乗院の場合、頼俊・頼憲・頼政・頼全・頼忠すなわち同院歴代(一般には同院四世)八世とする。

「頼」は系字ともいえよう)の生没記事があり(注5)、うち頼俊・頼憲・頼政には生・没双方の記事が備わっている(兼備)。今回(下)において貞治六年(一三六七)条に「一乗院頼俊法印誕生」と見えるが、これが、本書における最初の坊津―一乗院関係記事だといえる。

この頼俊(貞治六―応永二九年、一三六七―一四二二)については、現地所在の史料、例えば「西海金剛峯龍巖寺一乗院来由記」(注6)に「第四世祖有頼俊法印、聡敏博覽而遊高野・根来、極教相奥旨、随南都東南院、肆俱舎・法相、又随根来寺快憲学頭、受澤流之玄旨、後随仁和寺智恵門院宥海和尚、又承深旨(中略)以応永十五年辞根来寺、帰当山而安置所得書籍等而成根来寺之別院、根来寺是鳥羽院御願也、以故年々七月二日当聖諱辰日、掛真影、備饗饌、追福修薦」などと見え、頼俊は、「教相」面を根来寺側から受け、「事相」面は仁和寺側(広沢流仁和寺御流)から受けたと解しておこう(注7)。ここに、坊津一乗院は明確に根来寺系となり、本書において根来寺―新義真言系の記事が極めて詳細になる由縁だといえよう。

つぎに対外関係記事だが、意外に少なく、いわゆる 寧波の乱(大永三年、一五二三)など、十六世紀前半に日明・日琉関係の僅かな記事が見えるに過ぎない。

坊津および一乗院については、その地理的位置からして奈良時代から相当繁栄したかのように見られてきたが、実は史的には南北朝時代(十四世紀)からしだいに見え始めるといえ(注8)、この点、本書『日本帝皇年代記』においても同様である。

② 島津家(本家) 当主関係の記事

先ず建久六年(一一九五)に「嶋津判官忠久薩摩下向」とある。これは、前回(中)で指摘したが、本書において地域性を明確に示した最初の記事であり、以後、しだいに薩摩など南九州一帯は島津氏の領国になってゆく。時代が下って、天文十三年(一五四四)に「嶋津判官忠久薩摩下向以後三百五十年」とか、文禄四年(一五九五)に「嶋津判官忠久薩州下向四百年ニ当ル」とあるのは、まさにそれに対応している。その間、氏久(六代。島津家当主の代数は『島津氏正統系図』―島津家・尚古集成館、昭和六〇年―による)、忠国(九代)、忠昌(十一代)、忠治(十二代)、忠隆(十三代)、義久(十六代)、義弘(十七代)、家久(十八代)、光久(十九代)などと、中世後期〜近世初頭にかけて、島津家歴代(当主)の生没記事がある。また永禄十一年(一五六八)に「十二月十三日嶋津相州死去」、即ち島津忠良の没日記事が見えるのも注目したい(注9)。忠良(明応―永禄十一年、一四九二―一五六八)は、周知のように、もともと島津家支流(伊作家→相州家)の出だが、島津家全体を制覇し、子息の貴久を本家当主とし(十五代)、貴久の子息が義久・義弘兄弟(十六代、十七代)で大名島津家の本流となり、近世島津家発展の基礎をつくっている。

また天文七年(一五三八)に「薩州加世田知行、嶋津貴久」とあるのをはじめ、貴久→義久→義弘(『忠平』の「知行」関係記事(南九州三国に亘る)が目立つ。彼ら島津家当主に対して、ここでは呼び捨てだが、やがて後筆(異筆)箇所においては「様」と表記されている(後述)。

③ 島津忠良と新義真言宗(坊津一乘院、紀伊根来寺)

本書『日本帝皇年代記』において、天文二十一年(一五五二)に「十月十二日龍巖寺塔婆新立」、翌二十二年に「八月十二日塔婆柱立礎居」、そして弘治元年(『天文二四、一五五五』)に「坊津一乘院塔供養千部会」とある。これに照応する記事が『神社調』(島津家文書―57―1、史料編纂所現蔵)の「薩摩国西部」九に見えるが、同書によると、これは薩摩龍巖寺→一乘院の多宝塔建立(天文二一→二四年、一五五二→五五)に関する記事で、このとき檀那島津貴久・住持頼忠の旨が記され(『本願大檀主三州太守貴久公、当住頼忠和尚』)、また本尊→大日如来は島津忠良が寄進した由が明記されている(「中央大日如来、大檀那島津藤原朝臣忠良、法名梅岳常潤大和尚、開眼導師大僧都法印頼忠、当寺八代住持也」)。ここに一乘院多宝塔の建立は、住持頼忠(八代)の時期、島津忠良・貴久父子を檀那(スポンサー)として遂行されたといえる。また『神社調』には、この忠良・貴久・義久三代(父子・孫)の位牌が一乘院に安置されたと記している(注10)。

本書において、将に一乘院多宝塔建立と同じ時期、天文二十一年(一五五二)に「六月五日円明寺供養」とか、弘治元年(一五五五)の(頭書)に「七月二日鳥羽院四百年忌、於大伝法院有大曼荼羅供」とあって、当時の、紀伊根来寺→新義真言宗本山の法会についても記載されているのが注目できよう。何しろ円明寺と大伝法院は根来寺の中核であり、周知のように鳥羽院(上皇保元元年→一一五六没)は草創期の根来寺→特に円明寺と大伝法院→にとって殊更に所縁が深い。因みに『三国名勝図会』巻二十六(薩摩国河辺郡、坊泊)の「一乘院」項に、長承二年(一一三三)十一月三日鳥羽上皇院宣が収録され、その文中に「依大伝法院座主申請、以西海之龍巖寺、為根来寺別院」と見える。この院

宣は、それ自体は諸面で不安定な文書だが、鳥羽上皇―根来寺（大伝法院）―龍巖寺（一乗院）の関係を象徴していよう。

さらに『日新菩薩記』（島津家文書―45―56、史料編纂所現蔵）には、忠良（「日新」は号）について、坊津一乗院諸堂建立などの記事とともに、紀伊根来寺に父母らの位牌を安置して供養し、袈裟を寄進した由が記されている（注11）。留意すべきである。

④ 天候・災異関係記事

この点、永正七年（一五一〇）までの記事は、殆ど中央側史料によるもので『日本史総合年表』（吉川弘文館、二〇〇一年）などにも見えるが、それ以後は、南九州の天候・災異関係記事だといえ、他の史料（『島津国史』など）には見えず、貴重である。

⑤ 日欧関係記事なし

本書は、古来、対外関係記事を載せているが、中・朝関係のみで、日欧関係記事は見えない。即ち天文十二年（一五四三）のポルトガル人による鉄砲伝来、同十八年のスペイン人ザビエルによるキリスト教（カトリック）伝来は、いうまでもなくヨーロッパ人が初めて日本にきた出来事で、何しろ南九州―島津氏領国が直接の舞台となっているが、関係記事は本書に見えない。特にザビエルは、鹿児島に上陸後、早速、島津貴久（十五代）に謁見しているが、因みに薩摩藩の正史『島津国史』（山本正誼編、享和二年―一八〇二完成）を繙くに、鉄砲伝来については記事が見えるが（巻十六）、キリスト教（カトリック）伝来については触れられていない（巻十七）。もちろん当時の事情に由るといえよう。

〔後筆部分と入来院氏関係記事〕

A・後筆（異筆）部分について（『』で囲む）

本書において、ご覧のように（後掲「図1」参照）、寛永元年（甲子、一六二四）以降、最後の正保三年（丙戌、一六四六）までは、全て（干支、年号、事項とも）後筆（異筆）だといえる。

これ以降、朱合点の箇所は見当たらない。実は、これ以前から後筆―異筆箇所が混在しているが、あらためて本書を通覧するに、後筆と認められる最初の箇所は天正九年（辛巳、一五八一）の「水俣城落城」である（後掲「図2」）。この天正九年以降、散見される後筆部分は、概ね字が大きく、朱合点の箇所はない。後筆同士は同筆だと思え、従って本書は書写の上では二筆あるといえよう。おそらく本書（『年代記』）は、先ず冒頭から元和九年（癸亥、一六二三）までの分を編纂、まとめて書写され、記事を点検して朱合点も付けていたが、長年のこと放置され、やがて正保三年のころ、寛永元年からの分を記入し、遡ってそれ以前の分についても追筆く補入したと思える。後筆（異筆）部分については、『』で囲んだ。なお僅かだが、後筆部分に押紙箇所（修正のため貼付同筆）があることを、現地（入来院家）の原物で気付いた。また後筆（異筆）部分は、これまでとは全く違って、（頭書）箇所がなく、仏教関係の記事が見えない。注目してよからう。この後筆部分は、とにかく入来院氏関係記事が急増する。完全なローカル化である。以下、あらためて検討しよう。

B・入来院氏関係記事

本書『日本帝皇年代記』において、時代が下るにつれ南九州―島津氏関係の記事が増したが、さらに後筆（異筆）部分になつてからは入来院氏関係の記事が出現、急増し、殆どを占める。

① 入来院重高（十六代）

寛永元年(甲子、一六二四)以降、最後の正保三年(一六四六)まで、全て後筆(異筆)だと先述したが、当時、入来院家の当主は重高(十六代、注12)であった。また遡って天正九年(一五八二)から後筆箇所が散見され、後筆箇所同士は同筆であろうと、先に指摘した。ここに、重高の生没年(天正七〜正保四、一五七九〜一六四七)と後筆(異筆)の期間とがほぼ一致することからすれば、彼は最晩年に、その生涯における重要事項を記入(後筆)、本書(年代記)を増補したと解されよう。先代(十五代)の入来院家当主は重時だが、重時は男子ないまま慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦い(島津義弘に従軍)で戦死した。そこで重高が、島津義弘の命により、慶長十一年、養子として入来院家に入り当主となった。そもそも重高は、島津―薩州家の出、父は島津義虎(その五男)、母は島津義久(十六代)の嫡女(御平)であり、もと忠富(久秀、重国とも)と称した(注13)。義久の孫である。

② 表記上の特徴(「我等」「予」「様」の出現)
本書において入来院氏関係記事として最初の箇所は、慶長二年(丁酉、一五九七)の「高麗後ノ奥入、従肥後高麗、我等も五月相渡」云々だといえ、後筆箇所である(追筆、補入)。これは、重高(忠富)が入来院家に養子として来る以前のこと、彼が慶長の役(朝鮮出兵)に際して小西行長(当時、肥後宇土城主)に従って出兵した記事であり(注13参照)、「我等」とは、聊か俗的表现で、本書『日本帝皇年代記』の従来の表記とは馴染まないが、却ってこの箇所は重高自身が表記したものとも思わせる(補注3)。
この「我等」の他に、一人称として「予」と表記した箇所も見える。先ず慶長十年(甲辰、一六〇五)に「小将様(島津忠恒)兩度目ノ御上洛、予亦令供奉」(徳川秀忠の將軍就任に際して、島

津忠恒―のちの家久―の上洛に供奉)とか、寛永十七年(一六四〇)に「太守様(光久)有御上洛、予亦供奉」など見え、「予」は重高は薩摩藩主島津氏(当主)の上洛に際して「供奉」している。また元和三年(丁巳、一六一六)に「予有発熱病、四体憔悴」と見える。全く「予」は重高の私事であり、このことは、入来院氏系図の「重高」の項にも見えず、このような事項は、本書『日本帝皇年代記』において他に例を見ない。

そして右に「小将様」「太守様」と見えたが、後筆箇所においては、「小将様(慶長八年)」。忠恒、のちの家久、「義久様(慶長九年)」、「貫明様(慶長一六年。義久)」、「又三郎様(元和二年。光久)」、「惟新様」「松齡様(元和五年。義弘)」、「太守様(寛永七年。家久)」、「中納言様、薩州様(寛永一一年)」。家久、光久、「家久様(寛永一四年)」などとあり、重高は、同時代の島津家当主(16義久〜19光久)に対して「様」と敬称を付けている。本書では、これ以前、島津家歴代(当主)に対しては呼び捨てで表記していた(先述)。

③ 菱刈郡湯之尾時代と「私宅」火災
これも後筆―異筆部分だが、慶長十一年(一六〇二)に「九月、入来院家令連続領菱刈湯・真幸馬関田、住菱刈」、翌十二年に「正月有私宅焼」と見え、さらに同十八年に「御分国有御配当相替、入来院へ知行拝領」とあるのに、注目しよう。入来院氏(渋谷氏)は、鎌倉時代(十三世紀)に相模国渋谷荘から薩摩国入来院に地頭として下向して以来、近代(二十世紀)にいたるまで当地に定住しているが、ただ一度、文禄四年(一五九五)〜慶長十八年(一六一三)、大隅国菱刈郡湯之尾(現、伊佐郡菱刈町)に移封されている。これは、入来院重時(十五代)〜重高(十六代)の時期

に当たり、その事情は『平姓入来院氏系図』(入来院家現蔵「二番」)などに詳しい。重時は、この湯之尾から朝鮮出兵し(慶長の役)、先述の通り関ヶ原の戦いで戦死し(慶長五年)、重高が、慶長十一年の春、島津氏(薩州家)から入来院家に養子に入った。

その翌年のこと、本書の慶長十二年条に「正月有私宅焼」とあるのに注目しよう。この養子となった重高の時期、湯之尾の入来院家「私宅」が火災に遭ったのである。『平姓入来院氏系図』の「重高」項にも、「同(慶長)十二年丁未正月二十五日谷山御狩、依之重国(重高)越参魔府、留守失火、私第成焦土、此時家伝之重器多焼失者」とある。重高が鹿児島に行き留守中の「失火」で、「家伝之重器」が多く焼失した由である。先年、入来院家現蔵(五番)「平氏系図」について考察、全文翻刻した際、その原物(卷子本)の焼損箇所(特に表紙と上下部分)に注目、焼損の時期を『御文書改帳』(宝永四年、一七〇七。入来院家文書目録)以後ではなからうかと聊か無理に推測したが(「入来院家所蔵平氏系図について」下『長崎大学教育学部 社会科学論叢』六一号、三一ページ)、焼損時期は、ここに遡って慶長十二年、湯之尾時代の「私宅」火災の際だと見た方がよいのかもしれない。この「平氏系図」は、火中から辛うじて引き上げたのだろう。特に古文書―入来院家文書(史料編纂所現蔵、『入来院文書』の中核)も、恐らく湯之尾時代の「私宅」火災の際にそこにあつたらうが、重要な「家伝之重器」として救われたのだと察したい。従来、この湯之尾時代の火災については、留意されていなかった。

「本書の成立事情―島津家と入来院家の関係―」

こうしてみると、本書『日本帝皇年代記』は、①冒頭く元和九年

(一六二三)、②寛永元年(一六二四)―正保三年(一六四六)の概ね二部分あるといえ、筆跡の違いに対応している。①と②の接点(「図1」参照)は、今回(下)の範囲である。

①の部分については、これまで三回(上、中、下)にわたって見てきた。その記事内容は、日中両国に亘るもので(特に両国の神話時期、天皇や僧侶などの生没記事、中国王朝関係の表記に詳しい)、総じていえば、特に仏教関係の記事が多く、僧侶の生没記事が整っていること(特に生日まで表記)を指摘できよう。さらに仏教関係の記事(仏寺、僧侶など諸面)を通覧するに、傾向が明らかとなる。すなわち仏教↓密教↓真言宗↓新義真言宗と、最後は新義真言宗に収斂して行くといえる。今回(下)において、先に島津忠良(相州家、近世大名島津家本流の祖)・貴久(本家十五代)父子と新義真言宗(薩摩坊津一乗院、紀伊根来寺―新義真言宗本山)との深い関係に触れたが、ここで①部分、さらには本書『日本帝皇年代記』は、もともと島津忠良ら(グループ)が、坊津一乗院の「檀那」として同院の史的位置付けを明らかにし、相互(島津家と一乗院)の関係を強調するために、ブレンとして密教系学僧に協力(動員)させて、遡って仏教史料を中核としつつ、膨大な史料―情報を集積して編纂したものと想定しよう。

②の部分は、寛永元年(一六二四)―正保三年(一六四六)と、正確には遡って天正九年(一五八二)以降の後筆(―異筆)部分だが、全て今回(下)の範囲である。この期間―部分は、入来院重高(十六代)の生存期で(天正七―正保四)、従来①部分とは違い、仏教関係の記事は見えなくなっている。

ここに本書『日本帝皇年代記』は、もともと島津家側―特に相州家島津忠良系のグループ(相州家―本家、即ち忠良―貴久―義久・

義弘)―で編纂、作成されていたが、しだいに島津家と入来院家とが深い姻戚関係となったため(具体的には、後掲の両家「関係図」参照)、ある時点に入来院家側に入り(副本かもしれないが)、それ以降については、重高がそれに追筆(―後筆)、増補したと想定できよう。これほど広範囲の膨大な事項を収録している本書を、地方(辺境)の一地頭―領主たる入来院氏が最初から独力で情報(史料)収集して編纂、作成するのは無理だろう。

先ず入来院重聡(十一代)の娘が、島津忠良の子息貴久(島津本家十五代)の妻となり、義久(十六代)・義弘(十七代)・歳久らを生んだことは注目できる。これを契機に、両家(入来院家と島津家)の関係が緊密になった。試みに当時の両家関係図を作成したので、後掲する。重高(十六代)は、義久(島津家十六代)の孫である。

やがて『御文書改帳』作成時(宝永四年、一七〇七)に、先に(上)で指摘したように、現在の表紙『日本帝皇年代記』を付けたといえる。因みに表紙と後表紙は紙質・紙色ともに同じである。

さらに本書が、入来院氏の正統系図『平姓入来院氏系図』(入来院家現蔵「一番」、幕末の二十七代定経まで記載)以前に成立し、また薩摩藩の正史『島津国史』(享和二年―一八〇二完成)や薩摩藩領の総合的地誌『三国名勝図会』(天保一四年―一八四三ころ編纂)よりもかなり早く編纂、成立していることも意義深い。

そして本書『日本帝皇年代記』は、先年紹介した『平氏系図』(特に鎌倉北条氏系図草案)とともに、入来院家現蔵だが、全国的に見ても極めて珍重な史料であることを強調しておこう。

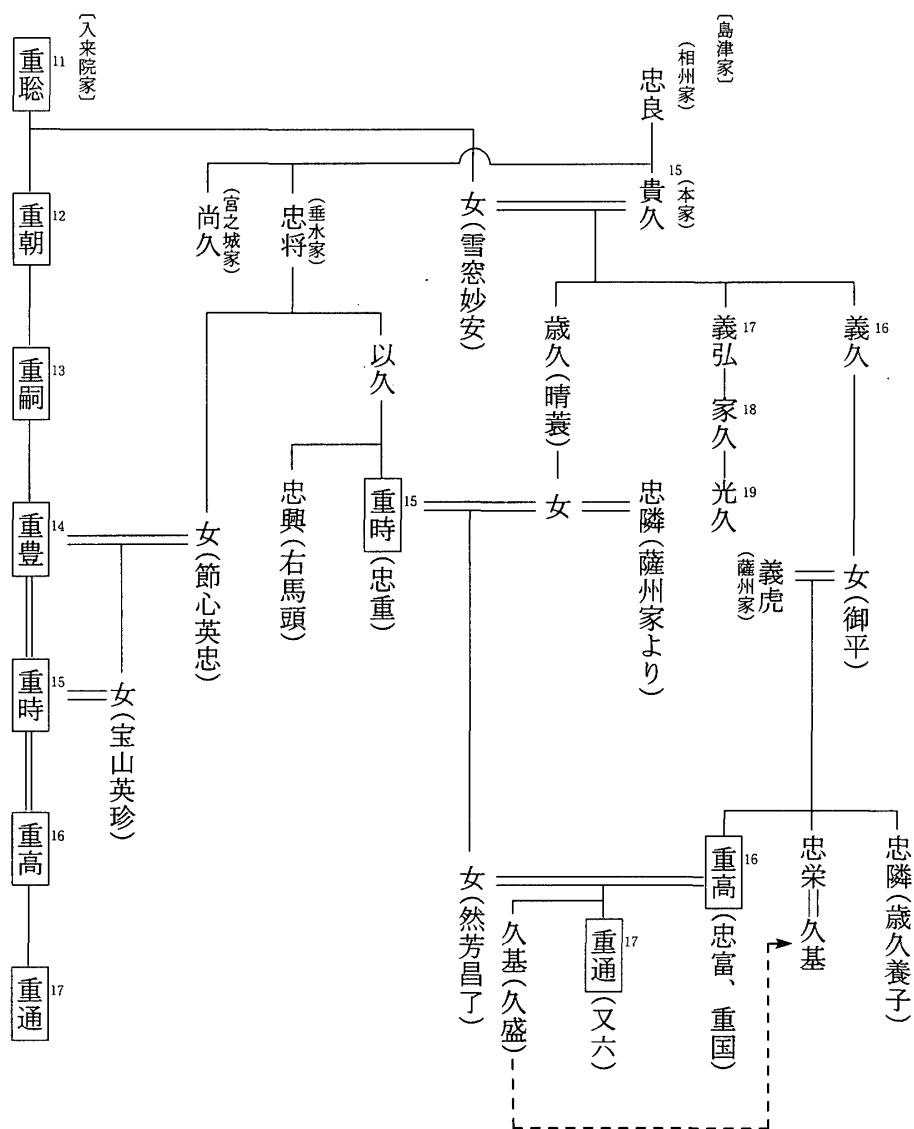
(補注1) 同様な傾向をもつ年代記として、特に『和漢年代記』(長野県・光前寺所蔵)、『永光寺年代記』(石川県・永光寺所蔵)、『山梨県史 資料編6』(中世3上、県内記録)所収『王代記』(勝山記)を挙げておこう。

(補注2) 本書において、中国関係最後の記事は乙酉・長治二年(一〇五)の「黄山谷(黄庭堅、北宋詩人)卒、九月晦日(頭書)である(中、一八ページ)。

(補注3) 因みに重高(十六代)の筆跡として、「庶流入来院家文書」に重高書状などが見えるが(『入來文書』所収、昭和三〇年)、最近、その原物を現地で見つけた(二〇〇三年一月、入來町麓・入來重朝氏宅)。

(補注4) ここで「号幹仁、天皇」とあるのは、恐らく書写の際の混入で、錯誤だといえる。そもそも「号幹仁」とは後小松天皇のこととて、実際、「百一 後小松院」項の割書に「号幹仁」と見える。

◎「戦国」江戸初期、入来院家―島津家関係図（注14）



※入来院家当主には、で囲み、肩に算用数字をつけ、代順を示した。
島津家（本家）当主には、算用数字のみ付けた。

「凡例」以下、本書(『日本帝皇年代記』)の最後の部分(下)を翻刻する。特に後筆部分は『』で囲んだ。なお今回(下)の部分に見える送り仮名(カタカナ)などは採用した。また頭書の部分は、便宜上、該当年の末尾に「(頭書)」として配列した。

(承前)

丁巳文保

二月三日改元、九月三日伏見院崩、五十三歳、十月廿五日一山國師入滅、七十一歳、(二巻)

戊午二

續千載歌数千三百四十四首、前大納言為世卿撰之、(二巻)二月七日東福寺炎上、(注15)

後醍醐天皇

諱尊治、三十歳即位、治十三年、曆應二年八月十六日崩、五十一歳、(皇子)

己未元應

四月廿八日改元、聖徳太子入滅已後七百年也、

庚申二

五月十九日南禪寺徳儉入滅、七十六歳、諡佛燈国師、(約徳)

辛酉元亨

二月廿三日改元、趙宋英宗即位至治元年、

壬戌二

癸亥二

甲子正中

十二月九日改元、趙宋英宗泰定元年、六月廿五日大覚寺法皇崩、五十八歳、(後宇多)

乙丑二

十二月十一日續後拾遺廿卷撰之、為藤卿奏之、(二巻)

丙寅嘉曆

四月廿六日改元、或云續後拾遺為定奏之、(二巻)

丁卯二

戊辰三

趙宋明宗即位天曆元年

己巳元徳

庚午二

趙宋文宗即位至順元年、義詮誕生、四月廿七日根来寺蓮華院實尊法印入滅、(足利)「日吉行幸」(頭書)

辛未元弘

八月九日改元、三月七日後西西天皇流于隱岐国、(注16)九月廿日光嚴院踐祚、(顯徳)

光嚴院

後伏見第一子、母廣義門院、(皇子)

壬申二

三月廿光嚴院即位、三月廿三日宮方年号始之、号正慶元年、

癸酉三

六月四日後西西天皇自伯耆國入洛、文觀上人自薩州硫磺嶋皈洛、五月廿二日相模入道滅亡、源氏出世、(北条高時)「趙宋順宗即位元統元年」(頭書)

甲戌建武

正月廿九日改元、後西西天皇重祚、四十六歳、弘法大師入定已後五百年也、(空海)

乙亥二

趙宋順宗至元年、(帝)元祐九年

丙子三 (足利) 正月十一日尊氏上洛、新田義貞合戰、尊氏鎮西下向、
九月五日根來寺良殿僧都入滅、七十三歲、
〔官方延元元年也〕(頭書)

丁丑四 (宗祿抄題) 大燈國師入滅、十二月廿二日

九十 光明院 (後伏見第二子、母同上、廿八歲即位、治十二年、

戊寅曆應 八月廿八日改元

己卯二 八月十六日後西西天皇崩、五十一歲、
始建天龍寺、

庚辰三 官方興國元年

辛巳四 (當) 趙宋順宗至正元年 自神武天皇二千年也、
(足利) 基氏誕生、(注17)

壬午康永 四月廿七日改元

癸未二 根來惣持院賴秀法印誕生、

甲申三

乙酉貞和 十月廿一日改元、八月晦日天龍寺供養、
七月十七日石屋和尚誕生、薩州鳴津忠久裔也、
(真慈)

丙戌二 (國) 虎開和尚入滅、六十九歲、官方正平元年也、
風雅集廿卷歌數二千二百首、花園院御自撰也、

丁亥三 三月十七日高野實性院玄海入滅、泉州人也、
十月廿七日中性院賴淳法印入滅、七十六歲、

戊子四 二月廿七日清水寺炎上、
十一月十一日花菌院崩、五十三歲、

九十 崇光院 (号本院) 光嚴院第一子、母三位局、内大臣公秀女、陽祿門
院、諱益仁、
(秀子)

庚寅觀應 二月廿七日改元

辛卯二 九月晦日夢忘國師入滅、七十七歲、
(卷) (練七)

百代 後光嚴院 (當御室永助親王、此王子也) 光嚴院第二子、母同上、諱弥仁、治十九年、

壬辰文和 九月廿七日改元、八月十七日帝受禪、
八月廿八日永平道元和尚百年忌、

癸巳二 (龜博) 中性院聖僧都誕生、

甲午三 十月廿五日尾州大須開山能信上人入滅、
(真福寺)

乙未四

丙申延文 三月廿八日改元

丁酉二 薩弼泊津始建立海印寺、

戊戌三 正月四日天龍寺炎上、四月晦日(足利)尊氏死去、五十四歳、
後圓融院誕生、八月廿二日鹿藪院(足利)義滿誕生、

己亥四 四月廿四日新千載歌數千三百六十五首撰之、
前大納言為定卿奏之、(三卷)

庚子五 沙門照覺於豊前刻五百羅漢、
石屋和尚出家、十六歳、(真卷)

辛丑康安 三月廿七日改元(九)

壬寅貞治 九月廿日改元(廿三)

癸卯二 四月廿日新拾遺廿卷歌數千九百十二首撰之、
民部卿為明朝臣奏之、(二卷)

甲辰三

乙巳四

丙午五

丁未六 正月十三日高野山宝性院快成入滅、一乘院頼俊法印
誕生、四月廿六日基氏死去、廿八歳、十二月七日義詮(足利)
死去、卅八歳、

戊申應安 二月十八日改元、大明太祖洪武元年

己酉二

庚戌三 官方建徳元年也、善光寺炎上、

後圓融院 後光嚴院第一子、母從二位仲子女、十七歳即位、
治十一年、明徳四年四月廿六日崩、卅六歳、(百)

辛亥四 大傳法院建立、今根来寺、政秀法印誕生、
三月二日中性院増喜法印入滅、七十三歳、

壬子五 官方文中元年也、

癸丑六 中性院聖融法印誕生、

甲寅七 三月十三日高野山寶性院信弘入滅、

乙卯永和 二月廿七日改元、官方天授元年也、

丙辰二 五月晦日中性院聖憲僧都入滅、六十八歳、

丁巳三 後小松院誕生、

戊午四

己未康暦 三月廿二日改元、十月十六日聖一(百爾并四)國師百年忌、
閏四月七日中性院良審僧都入滅、六十四歳、

庚申二 始建鹿苑院、根来智積院長盛法印誕生、

辛酉永徳 二月廿四日改元、官方弘和元年也、
新後拾遺集七卷撰之、(三卷)為重奏之、

後小松院 後圓融院第一子、母前内大臣從一位公忠女、六歲即位、
治三十二年、永享五年崩、五十七歲、諱幹仁、

壬戌二 始建相國寺、

癸亥三

甲子至徳 二月廿七日改元、官方元中元年也、

乙丑二 山城守護始山名氏清也、

丙寅三 二月十二日勝定院義持誕生、(足利)

丁卯嘉慶 八月廿三日改元、

戊辰二

己巳康應 二月九日改元、(元改)

庚午明德 三月廿六日改元、大明國師百年也、(無開普門)

辛未二 五月五日通幻和尚遷化、(寂蓮)
十二月晦日内野合戰、山名氏清打死、

壬申三 十月官方帝有御合躰、大和國自崎山大覺寺
行幸、自此官方年号被止之、(後龜山)

癸酉四 四月廿六日嶋津氏久逝去、法名齡岳、号即心院殿、
五月四日後圓融院崩、卅六歲、八月廿二日夜南禪寺
炎上、(注18)

甲戌應永 七月五日改元、十一月十七日義持元服、任官叙位、九歲、
福昌寺建立、開山石屋、檀那嶋津元久、法名怒翁玄忠、(足利)

乙亥二

丙子三

丁丑四 十一月十七日夜建仁寺炎上、

戊寅五 由良開山法燈國師百年忌、(興國寺)
一乘院賴憲法印誕生、(無本覺心)

己卯六 十二月廿一日大内義弘謀叛、於和泉境討罰了、

庚辰七

辛巳八 稱光院誕生、二月廿九日内裏炎上、(土御門)
始建北野經堂、

壬午九

癸未十 大明太宗永樂元年、賴瑜法印百年忌、(成徳)
六月四日相國寺塔為雷火烧亡、

甲申十一

乙酉十二 大洪水

丙戌十三

丁亥十四 三月廿三日中性院(聖地)聖僧都入滅、五十五歳、

戊子十五 五月六日鹿菌院(足利)義満死去、五十一歳、

己丑十六

庚寅十七

辛卯十八

壬辰十九

癸巳廿

後小太院第一子、母從三位藤原資子、光範門院、
百稱光院十三歳即位、治十四年、諱躬仁、改實仁、正長元年
七月廿日崩、廿八歳、

甲午廿一 六月九日大雪降、
千光国師二百年忌(明應癸酉)

乙未廿二 建長寺炎上、

丙申廿三 高野山宝性院有快法印入滅、
十一月十四日同无量壽院長覺入滅、七十一歳、

丁酉廿四

戊戌廿五

己亥廿六 六月高麗兵對馬寄合戦、大唐使来、

庚子二十七 旱魃、飢饉、

辛丑二十八 疫病有人大死、

壬寅二十九 十月廿三日一乘院頼俊法印入滅、五十六歳、
根来寺十輪院道瑜法印誕生、信州之人也、

癸卯三十 五月十一日於丹波永澤寺石屋和尚遷化、七十九歳、
同五日通幻和尚三十三年忌、設万僧供養、
(寂應)

甲辰三十一

乙巳三十二 大明仁宗洪熙元年 大洪水
八月十四日相國寺炎上、

丙午三十三 大明宣宗宣德元年

丁未三十四

百後花園院 崇光院御子、後小太院猶子、母從三位源重有女、
敷政門院、諱彦仁、治卅八年、
(享子)

戊申正長 四月廿七日改元、勝定院義持薨、(足利)四十三歲、七月廿日稱光院崩、廿八歲、

己酉永享

庚戌二

辛亥三 根来妙音院賴譽法印誕生、尾州人也、

壬子四

癸丑五 後小松院崩、五十七歲、

甲寅六 (空海)弘法大師入定已後六百年也、一乘院賴政法印誕生、(京都)万壽寺・因幡堂・六角堂炎上、

乙卯七

丙辰八 (英)大明宣宗正統元年 八坂雲居寺炎上、

丁巳九

戊午十 鎌倉發向於永安寺持氏自害、(足利)(注19)

己未十一 新續古今撰之、(飛鳥井)雅世奏之、

庚申十二

辛酉嘉吉 二月十七日改元、三月十三日大覺寺殿義昭傷、六月廿四日普光院殿義教被打于赤松、(足利)(滿地)

壬戌二 三月廿六日薩劬泊津實相院空智僧都入滅、八十五歲、

癸亥三 北野炎上、九月廿三夜寅時內裏入強盜、殿中悉燒失、七月慶雲院殿義勝逝去、(足利)

甲子文安

乙丑二 七月十九日中性院聖融法印入滅、七十三歲、八月十五日極樂院政秀法印入滅、七十五歲、(虎関和尚百年忌)(頭書)(師鍊)

丙寅三

丁卯四 四月二日南禪寺炎上、七月五日天龍寺炎上、

戊辰五

己巳寶徳 七月廿八日改元

庚午二 (鎌倉)大明景泰元年、夢窓国師百年忌

辛未三

壬申享徳 永平道元和尚二百年忌

癸酉二

甲戌三 二月廿日高野山明王院勝義法印入滅、七十四歲、

乙亥康正 (五) 七月廿六日改元

丙子二

丁丑長祿 (足利) 十月八日改元、義政任大政大臣、
七月十一日根来寺智積院長盛法印入滅、七十八歳、

戊寅二 (大風)

己卯三 (大風)

庚辰寛正 百日大雨、三月洪水、

辛巳二 一天下飢饉、人多死、

壬午三

癸未四 嶋津忠昌誕生、

甲申五

乙酉六 九月十三日夜大星流、其聲如迅雷、
大明成化元年

五 後土御門院 後花園院一子、号幹仁、天皇、諱成仁、治卅五年、
(補注4)

丙戌文正 二月廿八日改元、此年有大嘗會、
大内政弘上洛、

丁亥應仁 三月五日改元、
二月廿八日粉河寺焼失、
(京都一乱(頭書))

戊子二

己丑文明 四月廿八日改元、
十二月十八日一乘院頼憲法印入滅、七十二歳、

庚寅二 正月廿日嶋津忠国逝去、法名太岳元譽、号
深固院殿、十二月廿七日後花園院崩、
(五)

辛卯三

壬辰四

癸巳五 (五)

甲午六 四月一日嶋津立久逝去、法名節山、号龍雲寺殿、
(五)

乙未七

丙申八

丁酉九 自九月八日薩弐向嶋炎崩、至七箇日如闇夜、
冬大内政弘下向、在京十二年、

戊戌十

己亥十一 聖一國師二百年忌
(内爾并也)

庚子十二

辛丑十三

壬寅十四 四月十九日中性院聖覺法印入滅、

癸卯十五 自朝庭之御赦免狀下鎌倉殿成氏、(足利)

甲辰十六

乙巳十七

丙午十八 九月十三日未尅、東寺金堂・中門・講堂・鐘樓堂・
經藏并南大門・八幡宮以下悉燒失、

丁未長享

戊申二 大明弘治元年
開東御所・管領於高見原合戰(武藏)

己酉延徳 嶋津忠治誕生、

庚戌二 通幻和尚百年也、大明國師二百年忌、(無明普門)

辛亥三

壬子明應 七月十七日改元(元)

癸丑二 二月十五日當將軍今出川殿為畠山右衛門亮對治、
八幡善法寺殿御下向、翌日河内正覺寺御出陣云云、(足利義村)

甲寅三

乙卯四 長谷寺炎上、七月五日薩州村田傷害、一家悉滅亡、(天和)

丙辰五

丁巳六 嶋津忠隆誕生、

戊午七 六月十一日、八月廿五日、同廿八日大地震、人多死、
賴朝死去以後三百年、(應)

己未八 六月廿六日根來寺十輪院道瑜法印入滅、七十八歲、
七月十二日高野山明王院忠義法印入滅、

庚申九

百 後柏原院 後土御門院御子、

辛酉文龜 十月廿四日福昌寺泰雲和尚遷化、六十八歲、
(鹿兒島郡守孫)

壬戌二 七月廿九日京都宗祇逝去、(飯尾)

癸亥三 天下旱及來年大飢饉、人多死、琉球国与薩广
中絶、從是五年、根來中性院元祖賴瑜法印二百年忌、

甲子永正 畠山西家和与、(西)

乙丑二

丙寅三 大明正徳元年
十月廿二日坊津廣大寺德嚴和尚遷化、八十三歲、

丁卯四 六月廿四日細川右京大夫政元傷害、十二月大内義興為入京出坊州山口、

戊辰五 二月十五日嶋津忠昌自害、四十六歳、法名圓室源鑑、号興國寺殿、六月上旬建立大興寺、開山賴政法印、檀那忠治、
〔今出川殿義材御上落〕(頭書) 〔鹿兒島郡〕 〔瑞穂〕

己巳六

庚午七 八月七日大地震、天王寺・藤井寺没落、〔摂津〕 〔河内〕

辛未八 七月上旬京都兵乱、舟岡山合戦、細川六郎四國退散、及来年、西國大飢饉、九州殊人多死、〔山陰〕 〔播磨〕

壬申九

癸酉十 覚鑿上人入滅已後三百七十年也、七月天王寺石鳥居再興造立、

甲戌十一 建仁開山千光國師三百年也、〔明庵宗西〕

乙亥十二 六月五日根来寺妙音院頼譽法印入滅、八十五歳、八月廿五日嶋津忠治逝去、二十七歳、法名蘭窓津友、〔正月十一日高野山集會作乱〕(頭書)

丙子十三 三月廿八日備中三宅和泉守、為琉球国對治、兵船十二艘薩州坊津下着、六月一日和泉守被誅、〔國卷〕

丁丑十四

戊寅十五 聖德太子滅後九百年、皫瘡流布、西海童男童女多死、八月大内義興下向、在京十一年、

己卯十六 四月四日島津忠隆依皫瘡逝去、二十三歳、法名與岳龍盛、〔興〕

庚辰十七 二月廿二日一乘院賴政法印入滅、八十八歳、四月廿五日備中兵船坊津焼拂、〔二月十二日高野山炎上〕(頭書)

壬午二 嘉靖元年

癸未三 閏三月廿七日一号船出薩笏之津、四月廿七日着大唐寧波府、五月一日作乱、正使鸞崗逝去、五十二歳、〔瑞穂〕

甲申四

乙酉五

丙戌六 四月七日後柏原院崩御、

七百 後奈良院

丁亥七

戊子享祿 七月六日一号舟皈朝、着屋久嶋、始人數百五十五人、殘六十二人皈朝、舟頭日向出雲守、

己丑二 六月十六日頼全法印入滅、八十歳、

庚寅三

辛卯四 如来滅後二千四百八十年也、

壬辰天文

癸巳二

甲午三 (空海) 弘法大師入定已後七百年也、

乙未四 十一月十二日小池玄性法印入滅、

丙申五 四月十八日夜雨、氷雹大一二寸、其形不同也、
後奈良院即位、

丁酉六

戊戌七 十二月廿九日薩州加世田知行、嶋津貴久、

己亥八 三月薩劔谷山嶋津貴久手裏入、
九月一日同市來貴久知行、

庚子九 九月十二日大風

辛丑十 八月十一日大風

壬寅十一

癸卯十二

甲辰十三 嶋津判官忠久薩广下向以後三百五十年、

乙巳十四

丙午十五

丁未十六 六月廿八日高野山檀上鐘鑄、

戊申十七

己酉十八

庚戌十九 七月十八日大火

辛亥二十 龍猛開塔已來一千七百年也、
如來滅後二千五百年也、七月十四日相國寺炎上、

壬子二十一 十月十二日龍嚴寺塔婆釘立、六月五日圓明寺供養、
道師酉西三宝院前大僧正義堯并織衆六十人、十
弟子四人有舞樂曼茶羅供、

癸丑二十二 八月十二日塔婆柱立礎居、

甲寅二十三 十月三日岩劔嶋津貴久知行、

乙卯弘治 坊津一乘院塔供養千部會、自十月十八日、
四月二日帖佐嶋津貴久知行
〔七月二日鳥羽院四百年忌、於大傳法院有大曼茶羅供、道〔導師
小池坊玄譽法印左學頭(頭書)

丙辰二 八月二日小池玄譽法印入滅、

丁巳三 九月五日後奈良院崩御、六十二歲、
蒲生對治、四月十九日落城、嶋津貴久知行、
〔九月廿六日女一宮大聖殿崩御(頭書)

今上皇帝(正親町)

戊午永祿

己未二

庚申三 正月廿七日帝即位、

辛酉四

壬戌五

癸亥六

甲子七 天地開闢以來九千六億九十六万二千五百八十一年也、
真幸院嶋津義久知行、六月十二日也、

乙丑八 五月十九日義輝生害、(足利)

丙寅九

丁卯十 十一月廿四日菱蒯没落、城數十、嶋津義久知行、
坊津一乘院法印頼忠逝去、十月卅日、七十五歳、

戊辰十一 十二月十三日島津相州死去、法名号梅岳常潤、
六月八日飢肥伊東知行、八月廿日飯野者伊東陣、
九月義秋御入洛、五月七日妙富死去、
(足利義昭)
五月自廿六日潤十二日マデ大雨、依洪水岳崩烈、人多死ス(頭書)

己巳十二

正月廿日山野相良へ屋形方ヨリ去、四月五日己卯巳
剋大地震、自神武天王二千二百卅年也、五月六日丁
戌出大口求麻衆百十五人打取、七月十四日伊東大
夫殿死去、同十四日伊東衆真幸引陳、
(義基)
九月十四日大口屋形入部、高城郡薩州知行(頭書)

庚午元龜

正月五日屋形隈城知行、
三月九日忠平邪答院知行、
(島津義久)
(島津義弘)

辛未二

九月十二日延曆寺焼亡、於中堂衆僧御若衆二至迄
悉焼死、
九月四日己丑、於真幸院伊東衆四百廿人打取、北門
壬申三 大将三人也、九月廿七天下大隅早崎御屋形ヨリ御着
陳、

壬申三

癸酉天正

七月五日肝付ヨリ早崎陳切登、然義久第四ノ御舎
弟當番ニテ切返シ玉フ、向敵以上百廿人打取也、
正月廿日牛祢城義久御知行、同十九日肝付ヨリ子シ
メ放火ス、二月廿三日伊地知出仕、五月九日廻城、
同廿三日予城御屋形手裡入、
(頼之)
四月廿五日西冠大霰降リ(頭書)

甲戌二

乙亥三

三月十五日ヨリ於麿嶋犬追物有、同三日、

丙子四

八月十九日高原御陳、同廿二日落城、小林須木内木
場捨ル也、十月久嶋屋形御知行悉也、
九月廿七日夜ヨリ至霜月中、西當星モエリ、
十二月七日野尻知行、五月六日ノ内日勿捨伊東滅亡、
飢肥以上九千三百町義久知行、
十一月十三日ヨリ十五日迄、於鹿兒嶋犬追物アリ(頭書)

丁丑五

十二月七日野尻知行、五月六日ノ内日勿捨伊東滅亡、
飢肥以上九千三百町義久知行、
十一月十三日ヨリ十五日迄、於鹿兒嶋犬追物アリ(頭書)

戊寅六 九月十五日日向石城着陳、同晦日落城ス、

己卯七

庚辰八

辛巳九 『水俣城落城』
(肥後)

壬午十 六月二日信長逝去、同四月十二日甲斐武田戦亡無跡、
明知日向、羽柴筑前守被誅了、
(織田)
(光秀)
(秀吉)

癸未十一

甲申十二

乙酉十三

丙戌十四

丁亥十五 関白薩摩下向、九劔諸侍一偏二心及手二付給事、
(豊臣秀吉)

戊子十六

己丑十七 関東八ヶ大守北条(左)京太夫氏直没落、

庚寅十八

辛卯拾九 高麗為戸海、九州肥前国名護屋津石山
陳付、
(豊)

壬辰文祿 太閤高麗入名護屋御下向、諸軍勢五月
一日高麗都二打入、七月十八日晴義逝去、
(島津義久)

癸巳二 大日早、四月朔日ヨリ七月四日迄、

甲午三

乙未四 嶋津判官忠久薩劔下向四百年ニ當ル、
『當関白殿於高野山御切腹』
(豊臣秀吉)

丙申慶長

丁酉二 『高麗後ノ奥入、從肥後高麗、我等も
八月十五夜南門之城落、』
五月相渡、七月十五日夜番船崩を直ニ奥入、

戊戌三 太閤逝去、歳六十二、今ノ豊國大明神是也、
高麗開陳ノ歳也、三万三千人唐人於御陳被討、
(豊吉)

己亥四 高麗開陳ノ歳也、日劔庄内逆乱、六月廿三日山田城
責落、諸軍兵城ニ乗、其ヨリ本陳与定、十月二日陳付、

庚子五 志和知城二月五日ニ落城、東西二ツニ成、濃劔青木
原ニ合戦内、打勝テ日本ノ主人トス、

辛丑六

壬寅七 通幻和尚三百五十年忌
(寂應)

癸卯八 『小「將様関ヶ原以後、始テ御上洛」(注20)
(神紙)
(島津忠恒家久)

甲辰九 『義久様御嫡女御平様十一月十二日御遠行
被成候、』
(島津)
(重高母)

乙巳十

〔小將様兩度目ノ御上洛、予亦令供奉、〕
(島津忠恒(家久))

丙午十一

〔九月入来院家令連續領菱刈湯・真幸馬関田、住菱刈ニ、〕

丁未十二

〔正月有私宅焼、〕

戊申十三

〔從天下以御意於御國石船三百艘出来、江戸へ就御普請為御合力御進上、〕

己酉十四

二月廿四日琉球為對治薩广軍衆渡海、四月朔日琉球首里ニ打入、五月十四日琉球ヨリ此地へ渡ル、

庚戌十五

五月十九日家久琉球王位以御同心江戸へ御下向被成早、
(島津)

辛亥十六

〔正月廿一日「貫明様御逝去、清鋪」之地頭給、〕
(押紙) (島津家久)

壬子十七

〔鹿児嶋へ移、各一所持諸侍御座所移シ給、〕

癸丑十八

〔御分國有御配當〕相替、入来院へ知行拜領、
(押紙)

甲寅十九

十二月大坂為對治將軍御陳、日本諸軍衆同無支ニ成、十二月引陳、薩勿衆モ日州細嶋迄歸陳、
(徳川秀忠)

乙卯元和

四月大坂陳着、五月六日落城、將軍御所兩殿八月迄在洛、

丙辰二

〔又三郎様有御誕生、於西之丸御産時御弓被仰付、六月二日有御誕生、〕
(島津光久)

丁巳三

四月四日新田八幡落木仕候、〔子有發熱病、四體憔悴而二三年寢、〕

戊午四

正月ヨリ廿八日コトニ二三潤三四月雨也、依之世中吉、不吹大風、
(島津義弘)

己未五

三月十七日大地震、辛丑日未尅ナリ、
〔七月廿一日「惟新様御遠行」、松齡様御名日、〕
(島津義弘)

庚申六

春雨多、四月十二日三角四角霰降、御配當、
又五月三日庚辰同、〔四月廿日〕日数給、
目録給、
(島津家久)

辛酉七

〔霜月於鹿児嶋有犬追物、小笠原宗牛下向、琉球人見物、〕

壬戌八

〔八月十一日中丸御曹子有御誕生、〕(注21)
(島津久雄)

癸亥九

將軍御子御在京、八月六日参内被成、号當將軍与供奉與廿五丁、前代未聞由候、
(徳川家光)

甲子寛永元

加治木御姫様御誕生、霜月十二日御産弓被仰付、黄門様御父子御上洛、
(島津家久)

乙丑二

大坂へ二月上旬御入津、卯月十三日江戸御越着、七月廿二日御前様御遠行、
(心広慶安)

丙寅三

兩御所様御上洛、九月六日二条御城へ今上皇帝有行幸、同太子三日御滞留、
(徳川秀忠、家光) (後水尾)

丁卯四

江戸神田池ニ大鳥ヲ放タレ、人皆珍鳥由申、見物アリ、

戊辰五 六月三日太子有御崩御、天下之天子ヲ始、
公卿殿上人愁鬱ト云云、(高仁親王之)

己巳六 於鹿兒嶋御屋形御哥會御興行、
有松春色ト云兼題也、高野清水為煙燒、

庚午七 當將様、四月廿日ニ大御所様有御成、
三日相續各諸大名御振舞、(島津家久)
太守様於江戸公方様有御成、四月十八日ニ
(徳川家忠)

辛未八 寛永八曆、家久公江戸ヨリ六月五日御下向、
從七月中旬、大御所様御冠落、(島津)
(徳川秀忠)

壬申九 正月廿四日大御所様御逝去、家久様二月御上洛、
五月廿八日加藤肥後守御改易、六月廿八日ニ
又六郎死去、(忠臣)
(入来院重通)

癸酉十 三四月迄御分國檢地、正月小田原有大地振、

甲戌十一 當將軍様御代始、有御上洛、中納言様同薩忍様
御先ニ御上洛、予依在江戸ニ、十二月廿九日下向、(島津家久)
(島津光久)

乙亥十二 正月中納言様御上洛、正月十三日御打立、六月十
十月十五日ニ昌了御死去、(注22)

丙子十三 中納言様六月十八日御下向、九月比ヨリモ
御口中ニ御痛ミ出来、久志本式部太輔殿下向、(島津)

丁丑十四 家久様御腫物御平喻無之、慶祐法印下向、
其後意徳法印琢庵下向アレトモ、無檢、
右馬守殿五月十一日遠行、(島津忠興)

戊寅十五 正月元日於有馬城坂倉内膳正戦死、
同月八日天草へ相渡ル、黄門様二月廿三日
御逝去、有馬城二月廿七日八日攻落、(島津家久)
(龍前)

己卯十六 鬼利支且弥御成敗、以手札國中御有御攻、
光久様五月日刃表有御下迎、七日有御帰、

庚辰十七 太守様有御上洛、予亦供奉、於備後鱸
佐々權兵衛殿(?)為上使下向、為其御禮儀
御先ニ江戸参、御目見得、(島津光久)

辛巳十八 在江戸正月二日ニ上屋鋪罷出致御目見得、
正月廿九日江戸日本橋ヨリ火事起焼ル、(押紙)

壬午十九 正月廿九日太守様御上洛、三月七日從
上方御打立、江戸御着、即上使堀内ヨリ火動起、

癸未二十

甲申正保

乙酉二

丙戌三

注

(1) これ以前、「九十三 後伏見院」も割書きにおいて崩御年の記
事はない(中一二七ページ)。一方、これ以降だが、「百一 後円
融院」「百二 後小松院」「百三 称光院」は割書き部分に崩御年(月
日)の記事がある。

(2) 天皇の代数(即位順序)は『皇統譜』による旨を明記したものと
して(但し所蔵者は記さず)、例えば『角川 日本史辞典(新版)』(一九九六年)や服藤早苗編『歴史のなかの皇女たち』(小学館、二〇〇二年)の付録―「天皇系譜(図)」がある。

(3) 『皇統譜』は、現物未見だが、その正本は宮内庁書陵部に、副本は法務省に保管される由である(吉川弘文館『国史大辞典』5、「皇統譜」項―後藤四郎氏執筆)。

なお史料編纂所にも『皇統譜』と称するものが所蔵されており(徳大寺家本、33―78)、『国書総目録』(岩波書店)にも見えないものだが、この書では、北朝を代数として勘定しており(第九十六代光厳院)―「第百代後円融院」、南朝方は見えない。この書は、そもそも表紙に表題(外題)が記されていず、内題もなく、内容面では「第八十八代後深草院」から始まっており、持明院統―北朝系を詳述した系図である(後に「伏見殿」―伏見宮家系図などを付す)。この書名『皇統譜』は、史料編纂所に入ってから付られたのかもしれない。

(4) 根来寺相承や中性院流については、『真言宗全書』三九卷(昭和九年、血脈類集記)所収「根来寺教相相承之次第」、坂本正仁「真言相承諸流血脈図」(『豊山学报』四〇号、平成九年)、『根来寺史 史料編一』(昭和六二年)所収「曼荼羅裏墨書銘」(根来寺所蔵)、矢板真雄「紀伊国根来伝法灌頂記」(頼瑜僧正七百年御遠忌記念論集 新義真言教学の研究)大蔵出版、平成一四年)に詳しい。特に坂本氏紹介のものが多岐に亘り、有難い。

(5) このうち頼政・頼全・頼忠には『薩藩 旧記雑録』に授受文書が見えるが、その年次が明らかな頼政(授、永正十七―一五二〇年掟書)と頼忠(受、永禄十一―一五六七年島津義久書状)の場

合、それぞれの生没年にも対応し(頼政、永享六―大永一、一四三四―一五二一。頼忠、永禄一〇―一五六七没、本書『日本帝皇年代記』の記事(年次)の妥当性を裏付けているといえよう。

(6) 五味克夫「坊津一乗院聖教類等」(『鹿児島県文化財調査報告書』39集、平成五年)に翻刻あり。この五味報告に、頼憲が永享四年(一四三二)に書写した「即身成仏法」や、頼政が永正四年(一五〇七)に成した授与状(於龍巖寺道場并財天大事授与頼真)も見え、これらは、時期的に本書『日本帝皇年代記』に見える頼憲(応永五―文明一、一三九八―一四六九)や頼政(前注5)の生存期間に対応している。五味報告のコピーに際し、黎明館(鹿児島県歴史資料センター)の内倉昭文氏にお世話になった。

(7) なお時代は下って江戸期になるが、『三國名勝図会』卷二十六(薩摩国河辺郡、坊泊)の「一乗院」項に収録の、寛文五年(一六六五)九月二日「仁和寺総法務二品親王庁」下文(坊津龍巖寺あて)に「応以山務一乗院永代令兼帯本寺之院家事」―「承広沢之御流」などとあり、『根来寺史 史料編一』(昭和六二年)所収の、根来寺勸化物集記(宝暦四年、一七五四)に「薩摩国」―「一金老両 一乗院 門末共」などとあるのも、坊津一乗院が仁和寺や根来寺との関係を脈々と続けていたことを表現しているよう。

(8) 五味克夫「坊津一乗院跡と一乗院関係史料」(坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書『一乗院跡』、一九八二年)、中村明蔵「薩摩坊津と遣唐使船」(『鹿児島国際大学国際文化学部論集』三巻三号、二〇〇二年)参照。

(9) 『大日本史料』一〇編一に島津忠良没日条(永禄十一年十二月十三日)あり。忠良にとつて基本史料を多く提示している。

(10) なお五味氏は、『神社調』黎明館架蔵写真帳あり)から一乗院

関係記事を抽出し、前出(注8)稿に収載している。

(11)『日新菩薩記』に、「紀州根来寺ニ御父・御母・超公・登公・芳大姉ノ入牌、月拜、金襴ノ袈裟二衣、裡書ニ、嶋津相模入道殿日新公御寄進トアリ」とか「坊津一乘院諸堂建立、金襴ノ幡廿五流」などと見える。前出(注9)参照。

(12) 当主の代数は『入来文書』附録―「入来院氏系図」による。なおこの「入来院氏系図」は、入来院家現蔵(一番)『平姓入来院氏系図』の抄録で、当主に新たに代数を付けたものと気付く。

(13) 入来院家現蔵(一番)『平姓入来院氏系図』、『新編島津氏世録支流系図』所収『薩州用久一流』(『鹿兒島県史料 諸氏系譜三』)、『島津氏正統系図』(鹿兒島・尚古集成館) 四二ページ参照。

(14) この関係図は、上記(注13)の系図に加えて、『新編島津氏世録支流系図』所収「忠將一流」(『鹿兒島県史料 諸氏系譜三』)や『島津国史』を参照して作成した。

(15) この「二月七日東福寺炎上」は、実は翌年(己未、元応元年)のことである(白石虎月編『東福寺誌』二三九ページに典拠提示)。

(16) この「三月七日隠岐国」は、翌年(壬申、元弘二年)のことである(武家年代記)。

(17) この「(足利)基氏誕生」は、実は前年(庚辰、暦応三年)のことである。

(18) ここで明徳四年(一三九三)に配置される記事「四月廿六日嶋津氏久逝去」「五月四日後円融院崩」は、年月日(―数字)の関係からか、書写の上で錯覚・混乱している。正確には、島津氏久の没日はこれより早く「嘉慶四年(一三八七)閏五月四日」のことであり、後円融院の崩御日は明徳四年だが「四月廿六日」である(この点、見出し「百一 後円融院」の割書きでは正確に記され

ている)。

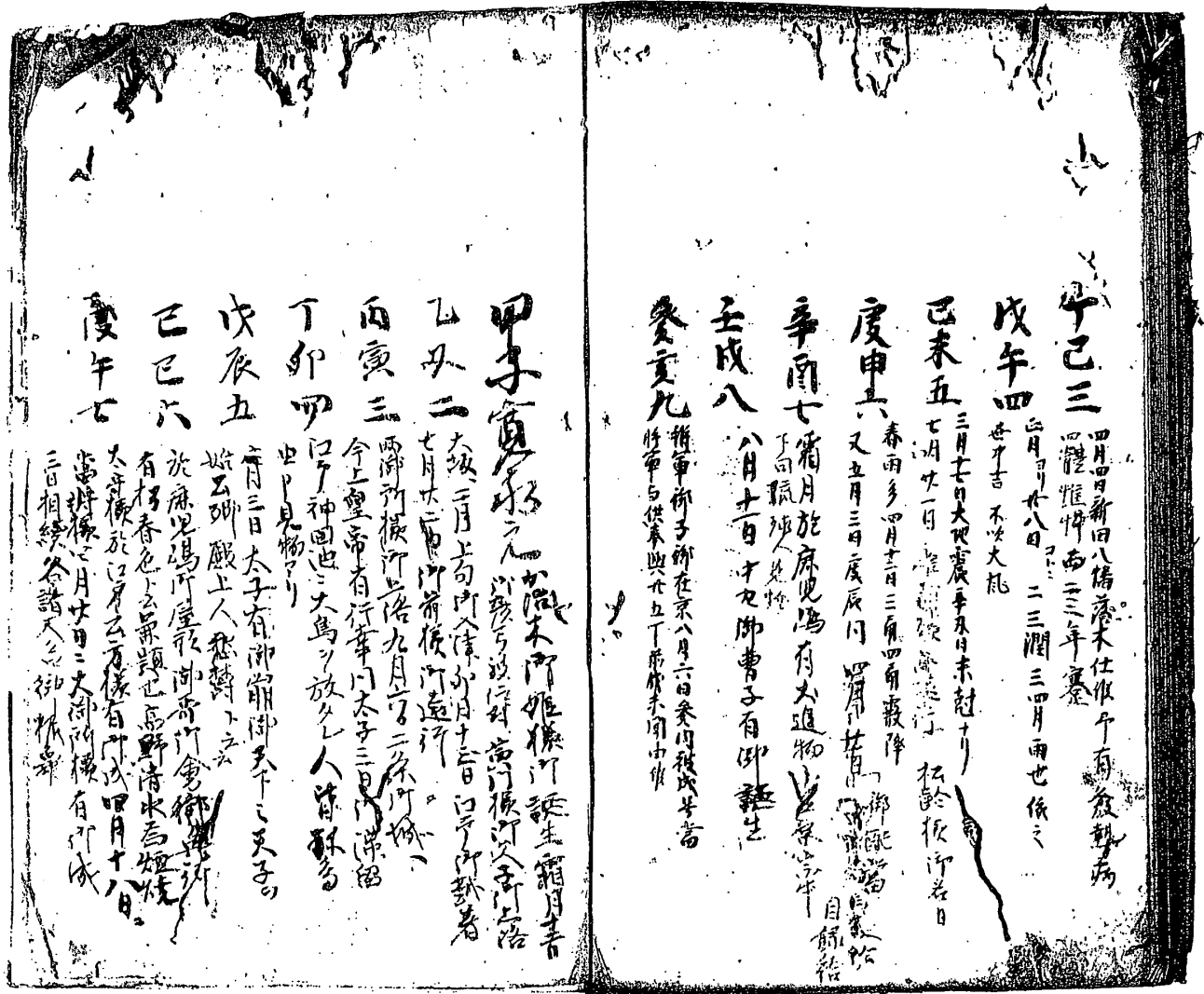
(19) この「鎌倉(足利)持氏自害」は、実は翌年、永享十一年のこと(永享記)、この行は、左に移した方がよからう。

(20) 因みに原物を点検するに、押紙部分の下、即ち元の文章には「小将様関原後初而御上洛」と見える。

(21) この「中丸御曹子」とは、生年月日の一致からして、島津光久(十九代)の弟「久雄」を指すか(鹿兒島、島津家・尚古集成館『島津氏正統系図』五八ページ参照)。

(22) この「昌了」とは、没年月日の一致から、重時(十五代)の娘で、重高(十六代)の妻だといえる。『平姓入来院氏系図』(入来院家現蔵「一番」)において、「女子 重高室」項に「寛永十二年乙亥十月十五日卒、行年四十二、号昌了寺、然芳昌了大姉」とある。但し『入来文書』附録―「入来院氏系図」の「女子 重高室」項においては、この部分は省略されていて、見えない。

○なお(補注)は、まとめて八ページに示した。



〔図1〕 入来院家所蔵『日本帝皇年代記』の部分（甲子・寛永元年= 1624 以降はすべて後筆部分）

<p>乙未</p>	<p>己未十七</p>	<p>戊子十六</p>	<p>丁亥十五</p>	<p>丙戌十四</p>	<p>乙酉十三</p>	<p>甲申十二</p>	<p>癸未十一</p>	<p>壬午十</p>	<p>辛巳九</p>	<p>庚辰八</p>	<p>己卯七</p>	<p>戊寅六</p>	<p>丁丑五</p>	<p>丙子四</p>	
	<p>閏東八十八年十月十日 <small>羽策後帝手殺誅了</small></p>		<p>閏白薩摩下向九兵諸侍一偏心及幸廿日平</p>					<p>六月百信長遊去同日十日甲斐武田戰亡無跡明和品</p>	<p>水俣城落城</p>			<p>九月十五日日向石城著陳同曠日落城</p>	<p>九月十五日野尻知行五日三河日向格伊東誠亡飯肥以上</p>	<p>九月十五日野尻知行五日三河日向格伊東誠亡飯肥以上</p>	<p>九月十五日野尻知行五日三河日向格伊東誠亡飯肥以上</p>

[図2] 入来院家所蔵『日本帝皇年代記』の部分（後筆の初見、辛巳・天正9年=1581の「水俣城落城」）